

# 平取町文化的景観保存活用計画書

〈第四次選定申出版〉

令和 7 年 11 月  
北海道平取町



# 目 次

第 1 章 文化的景観保護の意義	
1-1 文化的景観保護の意義・目的	1
1-2 保存活用計画策定までの経緯	1
1-3 検討体制	3
第 2 章 平取町の文化的景観	
2-1 位置及び範囲	5
2-2 文化的景観の特性	8
2-3 文化的景観の本質的価値	12
第 3 章 文化的景観の保存活用の基本方針	
3-1 基本方針	25
3-2 保存・活用に関する観点	25
3-3 運営体制に関する観点	25
第 4 章 景観保存・形成の方針	
4-1 文化的景観の構造	27
4-2 各景観単位の景観の特徴	31
4-3 土地利用と景観形成の方針	36
4-4 重要な構成要素	40
第 5 章 行為規制	
5-1 法令等による保護措置	115
5-2 重要文化的景観の保護に係る現状変更などの取り扱い	117
第 6 章 活用に関する事項	
6-1 狩猟としてのイウォロの保全と自然資源の利用	122
6-2 生活空間としてのイウォロの保全と現代・将来の生活文化との共存	123
6-3 文化的景観の理解促進のための普及啓発・情報発信	124
第 7 章 運営体制	
7-1 運営の仕組み	126

# 第1章 文化的景観保護の意義

## 1-1 文化的景観保護の意義・目的

文化的景観は「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法第2条第1項第5号）と定義されている。「平取町文化的景観保存活用計画（案）」は、平取町における「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」に関して、その保存活用のために必要な措置を定めようとするものである。

平取町は、アイヌの伝統と開拓の歩みを後世に継承していくための貴重な資産であり重要な基盤であるとして文化的景観を位置づけている。平取町に広がる山野や河川には、アイヌの伝統と開拓による土地利用の歴史が刻み込まれており、多様な背景を有する人々と文化が、葛藤と融合を繰り返しながら特色ある文化的景観を形成してきた。先住民の文化やその確かな継承を文化的景観保護との関わりを通じて説明することは世界的な流れであり、ユネスコ世界文化遺産においても顕著な傾向である。こうした多文化の重層する平取町の文化的景観もまた同様に、世界に向けて説明すべき価値を有するものであり、その認識の下、地域空間と生活空間のより一層の発展を目指し今後の地域振興に役立てていくことを目指している。

将来に向けて、この文化的景観を町民の参画と協働によって保護し、育み、誇りと愛着をもって次世代へと引き継いでいくことを目指している。改めて今ある文化的景観の価値を再確認・評価し、適切に保存活用するため、今回の追加選定によって景観の価値をわかりやすく正しく周知し、それがアイヌ文化振興に資するとともに、未来に向けた地域の活性化につながることを目的として計画を作成する。

あわせて、本計画に示す基本方針に基づき当該文化的景観の保存活用を進め、以て国民の利用、文化振興に供するものである。

## 1-2 保存活用計画策定までの経緯

### (1) 「アイヌ文化振興法」、「アイヌ施策推進法（アイヌ民族支援法）」の制定

明治32（1899）年の制定から100年あまり施行されてきた「旧土人保護法」に代わるアイヌ民族に関する新しい法律の制定が必要であるとの世論の高まりを受け、平成9（1997）年5月に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統などに関する知識の普及及び啓発に関する法律」（アイヌ文化振興法）が成立した。本法の目的は「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、あわせて我が国の多様な文化の発展に寄与すること」であり、アイヌ文化の振興を核とする内容であった。

その後の平成19（2007）年、国連で「先住民族の権利に関する宣言」が採択されたことを受け、日本政府は新たなアイヌ施策について検討を行い、令和元（2019）年4月に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（アイヌ施

策推進法またはアイヌ民族支援法）を国会で承認し、同年 5 月に施行された。本法はアイヌ民族を初めて先住民族と明記し、従来の文化振興や福祉政策に加え、地域や産業の振興などを含めたさまざまな課題を解決することを目的としている。

## (2) アイヌ文化保存・継承に関する取組み

平取町では「アイヌ文化振興法」施行に先立って、二風谷区域を中心とし、住民の取組みと連携しながら「アイヌ文化の里づくり構想」など、地域の特色ある文化を保存・継承するための独自施策や事業をいち早く実施してきた。平取町立二風谷アイヌ文化博物館や萱野茂二風谷アイヌ資料館はその象徴的な存在であり、両館の有する資料の一部は「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として国重要有形民俗文化財の指定を受けている。また、平取アイヌ文化保存会（国重要無形民俗文化財「北海道アイヌ古式舞踊」保持認定団体）、平取町二風谷アイヌ語教室などによる文化活動を推進し、その成果を町民に普及、共有することを図るとともに、長年にわたって蓄積してきたところである。

こうした文化財の保存・継承の活動が評価され、平成 25（2013）年、平取町二風谷の工芸品「二風谷イタ」（盆）と「二風谷アットゥシ」（樹皮の反物）が、北海道で初めて経済産業大臣から伝統的工芸品に指定された。

国の施策として令和 2（2020）年 7 月に白老町に「ウポポイ（民族共生象徴空間）」がアイヌ文化の復興・創造・発展のための拠点として開業した。平取町としては、沙流川流域の広域な自然空間や、これまで培われたアイヌ文化伝承活動を活かし、象徴空間の広域関連区域の役割として、アイヌ文化伝承・人材育成機能を果たすと共に、平取町における文化伝承・人材育成の基盤の強化を促進している。

平成 22（2010）年には、「アイヌ文化の保全及び振興」に関する協定が三井物産株式会社と平取アイヌ協会、平取町において締結され、さらに北海道古来の森林の再生やアイヌ文化伝承に必要な草本・樹木の育成、回復、保全などをめざし、平成 25（2013）年には、北海道森林管理局と平取町、北海道アイヌ協会平取支部（現平取アイヌ協会）の三者による「21 世紀アイヌ文化伝承の森再生計画-コタンコロカムイの森づくり推進のための協定書-」が締結され、令和 2（2020）年に同協定が更新された。

令和 2 年 3 月に株式会社平取町アイヌ文化振興公社が設立され、「21 世紀・アイヌ文化伝承の森プロジェクト」等の事業により森林生態系の復元・創造とともにアイヌ文化の今日的継承と担い手の育成を目的とした事業を行っている。また、アイヌ文化の振興を目的としたガイドの養成等ソフト面の充実を図り人材育成を行っている。森林生態系の復元・創造の場として、協定を結んだ国有林内に場所の提供を受け、植樹、動物侵入防止柵の設置、フクロウの巣箱設置等を実施している。

## (3) 景観づくりと文化的景観保存に関する取組み

平取町における景観行政の取組みは、平成 5（1993）年に「みどり豊かな環境保全条例」

を制定したことにより本格的に始まった。文化的景観形成に関しては、「アイヌ文化の里づくり」、「沙流川流域における伝統的生活空間整備構想」（沙流川流域イオル構想）、「アイヌ文化クラスター形成構想」などの行政施策・事業が展開される中で、現在の取組みにつながる基盤づくりが進んだ。また、平取アイヌ文化保存会、平取町二風谷アイヌ語教室などの地域住民の文化活動を活性化することを通じて管理主体となる人材、組織の育成が図られてきた。

他方では、沙流川総合開発事業に伴うチャシ跡など遺跡の発掘調査を契機に埋蔵文化財の分野をはじめとする文化財保護体制が整えられ、沙流川歴史館の建設・運営と相まって拡充されてきた。

重要文化的景観は、都道府県又は市町村の申出に基づき、当該都道府県などが定める景観法第8条第2項第1号に規定する「景観計画区域」又は同法第61条第1項に定める基準に照らして当該都道府県などがその保全のため必要な措置を講じているものの中から選定される。平取町は文化的景観保存計画の策定に先立ち、平成18年10月に景観行政団体となり、平成19（2007）年3月に「景観づくり条例」を制定、あわせて「平取町景観計画」を策定した。景観計画は、原案の段階で住民に対する説明や意見聴取を行い、町長による決定後は2週間の公告・縦覧期を設け、周知を図った。

文化的景観については、平成17（2005）年度から文化庁による補助事業として「文化的景観保護推進事業」が実施され、町内外の学識経験者などによって構成された「平取町文化的景観検討委員会」による指導のもとに関連調査と計画立案作業が進められ、やはり広聴の過程を経て保存計画を定めた。重要文化的景観選定申出は、こうした経緯をふまえて行い平成19（2007）年「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」として、平取町内全域の中から6区域A～F区域が選定され（本計画書では以降、第一次選定区域と呼称する）、さらには平成28（2016）年にG区域（以降、第二次選定区域と呼称する）、平成30（10）年にH区域（以降、第三次選定区域と呼称する）が追加選定された。H19（2007）年11月1日に町内外の有識者・学識者などにより構成される「平取町文化的景観保全委員会」が設置され、以降、文化的景観の効果的な保全・活用を図る観点から検討、協議が行われている。

第四次選定においては第一次選定から第三次選定区域の再整理を行い、AからHの区域範囲の拡張と新規にI区域の追加申し出を行う。なお今回の第四次選定をもって、平取町の文化的景観の全体像を提示することとなる。

### 1-3 検討体制

#### (1) 平取町文化的景観保全委員会

文化的景観の検討については、「平取町文化的景観検討委員会」をへて、平成17（2005）年度から「平取町文化的景観保全委員会」を設置し継続的に検討を行っている。年度ごとに委員を委嘱しており、令和4年度の委員は以下のとおりである。

表 1-1 委員名簿

No.	氏名	所属・役職	役割
1	篠原 修	GS デザイン会議代表、政策大学院大学教授(社会基盤工学)、東京大学名誉教授	委員長
2	三木 昇	北ノ森自然伝習所主宰(専門・植物生態学)	
3	萱野 志朗	学識経験者(平取町文化財審議会委員)	副委員長
4	木村 英彦	平取アイヌ協会会長	
5	品田 祥皓	平取町自治振興会副会長	

(敬称略)

## (2) 実施体制

文化的景観保存活用計画策定にあたっては、文化的景観の本質的価値をもとに、景観構造、景観単位、構成要素の理解と文化的景観の保全活用方策に関する知識と経験を有する専門性が求められることから、以下の実施体制をつくり業務を実施した。

表 1-2 実施体制名簿

No.	氏名	所属・役職	役割
1	西山 徳明	北海道大学観光学高等研究センター 教授	業務リーダー
2	麻生 美希	同志社女子大学 准教授	専門調査員
3	四戸 秀和	北海道大学観光学高等研究センター 学術研究員	専門調査員
4	伊田 行孝	株式会社ノーザンクロス 取締役	業務管理者
5	柳 秀雄	株式会社ノーザンクロス 平取事務所所長	業務管理補助者
6	酒井 裕司	株式会社ノーザンクロス (イメージ・ランドスケープ・プランニング)	専門調査員
7	川上 倫子	株式会社ノーザンクロス 平取事務所	調査員

(敬称略)

## 第2章 平取町の文化的景観

### 2-1 位置及び範囲

#### (1) 位置

平取町は北海道日高地方の西端に位置し、太平洋岸から最短で6 km程離れた内陸の町である。総面積743.09 km<sup>2</sup>で東西52.8 km、南北41.1 kmと三角形に近い形状で、そのうち約86%を森林が占めている。日高山脈の熊見山を發し町内を貫流する沙流川やその支流沿いに拓かれた緑豊かな町で、“平取”という町名はアイヌ語の「ピラウトウル=崖の間(の地)」からきている。

#### (2) 既選定範囲と追加選定申出調査範囲

平取町の「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」に選定された区域は、平成19(2007)年の第一次選定区域である6区域と、平成28(2016)年の第二次選定区域であるG区域、平成30(2018)年の第三次選定区域であるH区域である。この8区域は、農地法・農振法・森林法・河川法・みどり豊かな環境保全条例(町自主条例)などによって概ね保護されている。

第四次選定では、文化人類学者である泉靖一が平取町で調査し記録を残したアイヌの伝統的生活空間である「イウォロ」を景観単位として設定する。平取町域を含む沙流川流域を構成する16のイウォロ(景観単位)を、地形的特徴や土地利用形態等から、景観構造の特徴を示すため平取町内の沙流川流域を以下の4つに分類した。すなわち、河口に面した低地・海岸段丘の広がる沙流川下流エリア、沙流川と額平川の合流後の狭小な谷地形に低地・河岸段丘の立地する沙流川中流エリア、他の平野部に通じる広大な山地と河川沿いに開けた低地・河岸段丘を有する沙流川上流エリア、ポロシリを含む広大な山地を最奥地とし河川沿いに開けた低地・河岸段丘を有する額平川流域エリアである。

追加選定申し出範囲は、象徴(ランドマーク)として古くから認識されてきたポロシリから本町までの間の選定されていない範囲を、イウォロの考え方をを用いることにより繋げていくものとする。この範囲は第一次選定から第三次選定の選定エリアも含むものである。このため、既選定エリアとの一体的な管理・運用を行うことを目的として、AからHと一体とみなすことが可能な追加要素については各該当項目を拡張する形で対応し、その他の要素についてはIとして項目を追加する。Iはヌペキペッコタンのイウォロであり、ポロシリを含む額平川上流の集水域と、宿主別川の集水域からなる山地エリアである。このエリアは主に国有林が占めており、名勝ピリカノカに指定されている範囲も含まれる。

また、第四次選定においては、既選定エリアの分類を地形の視点で見直しを行う。地形分類は(1)河川、(2)低地及び河岸段丘、(3)山地とし、AからIの項目を振り分ける。この地形分類を基に保存・管理の方針を検討するものとする。

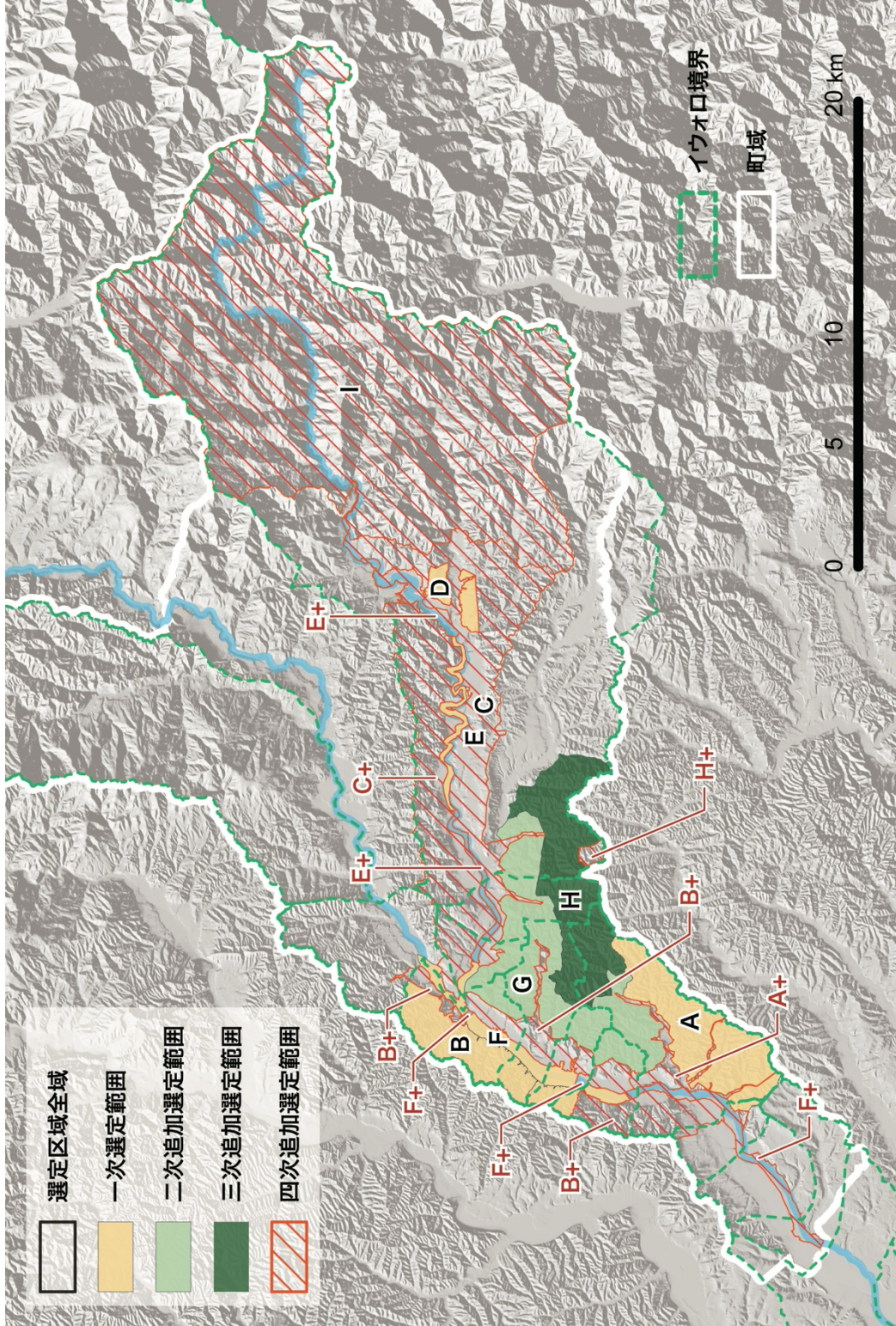


図 2-1 重要文化的景観 第一次、第二次、第三次選定区域及び第四次選定申出区域

表 1-2-2 重要文化的景観第一次、第二次、第三次選定区域及び第四次選定申出区域の名称

	区域名	文化的景観の名称	所在地	面積(ha)	区域の特性	
第二次	A	ピラウトウルナイ区域(ペンケ・パンケ)	北海道日高地方における里山的景観	字川向、字小平	1,928.8	林間放牧(混牧林)、森林の動植物資源の利用、山越え道
	B	二風谷区域(ニブタニ)	アイヌの伝統を伝える山野と集落の景観	字二風谷	1,302.3	森林の動植物資源の利用、山越え道、文化交流、アイヌの伝統的集落、チャシ跡
	C	芽生区域(メム)	峡谷との対照が際だつ戦後開拓地の景観	字芽生	10.2	林間放牧(混牧林)、戦後開拓移民の集落
	D	宿主別区域(シュクシベツ)	牧野・牧野林とすずらん群生地の景観	字芽生	310.5	林間放牧による牧野林、すずらん群生地の形成、森林の動植物資源の利用
	E	額平川区域(ヌカピラ)	自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織りなす多文化な河川景観	総主別川河口～額平川・アブシ川合流点付近の河川敷地	220.8	河川・水辺の動植物資源の利用、灌漑施設、アイヌの伝統的集落立地、チャシ跡
	F	沙流川区域(シシムカ)	自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織りなす多文化な河川景観	にぶたに湖上流端から新平取大橋	608.5	河川・水辺の動植物資源の利用、灌漑施設、アイヌの伝統的集落立地、チャシ跡
第二次	G	三井沙流山林南区域	IWORを基層とした、アイヌ文化伝承及び人々の営みを支えてきた里山的景観	字小平、字二風谷、字荷負、字貫気別	3,097.3	森林施業林、森林の動植物資源の利用、アイヌの伝承地、チャシ跡、山越え道、農業と林業の兼業、炭窯跡など
第三次	H	アベツ・貫気別南区域	アイヌの生活民具など地域の文化と人々の暮らしを育み創造する豊かな森林景観	字小平、字二風谷、字貫気別	2,365.0	針広混交林、森林の動植物資源の利用、アイヌ語地名、山越え道、近代開拓の痕跡、農業と林業の兼業、森林施業林など
第四次	A+	ピラウトウルナイ区域(ペンケ・パンケ) 拡張	北海道日高地方における里山的景観	字小平	370.6	林間放牧(混牧林)、森林の動植物資源の利用、山越え道
	B+	二風谷区域(ニブタニ) 拡張	アイヌの伝統を伝える山野と集落の景観	本町、字小平、字二風谷、字荷負、字長知内	1,969.4	森林の動植物資源の利用、山越え道、文化交流、アイヌの伝統的集落、チャシ跡
	C+	芽生区域(メム) 拡張	峡谷との対照が際だつ戦後開拓地の景観	字荷負、字貫気別、字芽生	6,608.8	林間放牧(混牧林)、戦後開拓移民の集落
	E+	額平川区域(ヌカピラ) 拡張	自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織りなす多文化な河川景観	額平川流域の未選定範囲	475.0	河川・水辺の動植物資源の利用、灌漑施設、アイヌの伝統的集落立地、チャシ跡
	F+	沙流川区域(シシムカ) 拡張	自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織りなす多文化な河川景観	日高町の境界から額平川との合流地点までの未選定範囲	527.2	河川・水辺の動植物資源の利用、灌漑施設、アイヌの伝統的集落立地、チャシ跡
	H+	アベツ・貫気別南区域 拡張	アイヌの生活民具など地域の文化と人々の暮らしを育み創造する豊かな森林景観	字貫気別	78.1	針広混交林、森林の動植物資源の利用、アイヌ語地名、山越え道、近代開拓の痕跡、農業と林業の兼業、森林施業林など
	I	ポロシリ・額平川源流区域	カムイミントラ(神の庭)と豊かな動植物を育み人々の暮らしを支えた森林景観	字芽生、字豊糠	21,045.0	名勝、森林施業林、針広混交林銘石産出地、アイヌ語地名など
計				40,917.5	既選定：9,843.4ha 追加選定申出：31,074.1ha	

## 2-2 文化的景観の特性

### (1) 文化的景観の重層的構造

平取町の文化的景観は、景観をレイヤー構造で捉えることができる。沙流川流域の地形を基に、河岸段丘地帯を生活の場として形成されたアイヌ文化、近代開拓の歴史が積み重なって構成されている。ただし、そのレイヤー構造は単純に過去の歴史が置き換わったものではない。現在の景観には、景観の形成に関連する時代の変遷の中で、その時々々の景観を特長づける要素が現在までそのまま残っているもの、形を変えて残っているもの、途中でなくなってしまったものもある。

また、景観の形成にあたっては、アイヌ文化による森林・河川利用の在り方を基層としつつ、これを社会の変化に適応させながら継承することによって伝統的な持続型資源管理の精神を維持しようと努めてきた営為を内包したものと見える。なお、近代開拓はアイヌの人たちもこの営みに深く関与して、生活・生業を成り立たせてきたこともこの地域の特色である。

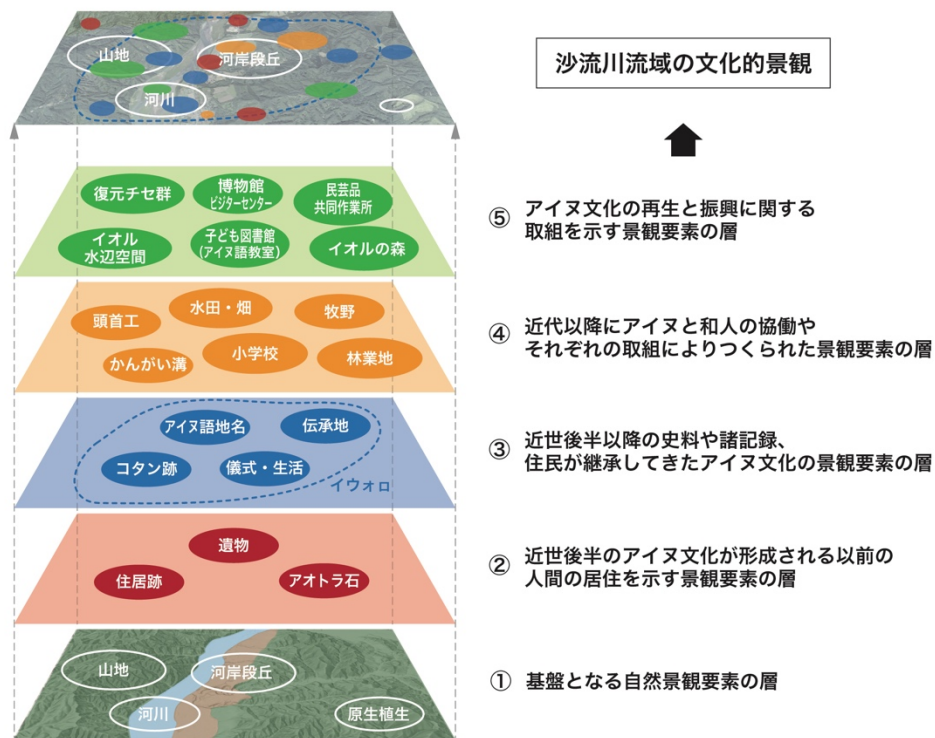


図 2-2 平取町文化的景観レイヤー構造

## (2) 分野別にみた平取町の文化的景観の特性

平取町の文化的景観の特性は、自然、歴史文化、社会面から、以下のようにとらえられる。

### ① 自然的特性

沙流川上流部では、チャートなどの堆積岩と変成岩からなる高い峰々と深い溪谷が刻まれ、時に大きな崖となり、河川面との対比がダイナミックな風景を形成している。中・下流部は、上流部に比べると流れは穏やかで、河岸段丘の発達が顕著である。

近世までの沙流川流域の植生は針広混交林が支配的で、河川沿いには広大な洲が形成され、ヤナギやドロノキ、ハルニレが広く分布していたと考えられる。川に流れ込む沢地にはカツラやオヒョウニレのある溪畔林が存在していた。近世までのアイヌの暮らしにおいては、木材の大規模な伐採が行われず、丸木舟などに用いる大径木（カツラ、オオバヤナギなど）の利用も単木的な伐採に止まっていたことから、資源植物を多く含むハルニレ林をはじめ、森林・河川の生態系は世代を超えて維持されてきた。食料などの資源植物は、ハルニレ林などの林床から採取されるものが重要であり、そうした場所はその後農耕地へと姿を変え、現在も生業を支える土地として機能している。

平取町の河川周辺の地表は、硬い岩盤の上に砂礫が混入した砂土壌や植生で覆われ、川に面する急傾斜地では基岩の露出している箇所が多くみられる。そのため大雨が降ると崩れやすくなり、一度崩れたところで繰り返すという特性がある。

こうした流域の自然特性は、著しく浸食と堆積を繰り返し、部分的にハルニレ林の林床が荒廃して有用植物資源が枯渇してしまう現象を引き起こしてきた。このような状態はアイヌ語で *moshir-eru-ushi* (モシリ エル ウシ) と呼ばれ、一種の飢饉現象として泉靖一がまとめている。これは山の斜面が崩れることから始まり、山裾から河川にかけての荒廃を表す言葉である。小規模なものは場所を変えながら数年に一度、大規模なものは稀に起こる。このような環境変化は、短期的には森林植生に一定のダメージを与え、「飢饉」と呼ばれる状態を引き起こすが、長期的には資源植物を減少させる笹類を埋めることにより、その繁茂を抑制し、森の新陳代謝を促進し、資源利用の持続性を高める効果をもたらしたと考えられる。

明治期以降、大規模な商業的伐採が行われるようになったが、伐採後は放置されたため、二次的な落葉広葉樹林が形成されていった。終戦後、川沿いの平坦面は耕作地や放牧地に変わり、傾斜地の植生はトドマツ、カラマツの針葉樹の植林地へと変わっていった。一方で、自然林の構成樹種は基本的には大きく変化しておらず、現在も資源植物が多く残存し、生活・生業の素材となっている。

「牧野林」は、軍馬等の牧畜を目的とした林間放牧の過程で生まれた森林利用の形態である。これが比較的良好に残る日高地方は、ミズナラ林、コナラ林が主体であり、多くは丘陵部から山地下部にかけて分布する。昭和中期以降、ピラウトゥル区域の森林を含め町内諸処

では林間放牧が見られなくなった。日本有数の広さを誇る宿主別区域内の「すずらん群生地」は、牧野林のもとでの過放牧が生み出した、特徴的な林床の植生である。

現在、支流沿いに残るハルニレ林は、堤防等が建設される前は沙流川流域全体に広がっていたと考えられ、アイヌの生活を支える場所であったとみられる。このような景観の、特に農地化による消失が、「近代開拓」によって生じた景観変化の主要なポイントといえる。だがそれは流域における均質な変化ではなく、空間的な多様性を残した点も、重要な留意点である。

概括すると、北海道の太平洋側で寒冷寡雪の気候帯に位置することや、日高山脈の山裾を町域内に擁する地質学的な特徴をもつ山野、河川の自然的特性は、人々の生活・生業のあり方に影響を与えており、日本列島の他地域と比較した際、景観面における地方的特色を示す基盤となっている。

## ② 歴史・文化的特性

景観の歴史的特性においては、河川に沿って立地するチャシ跡をはじめとする遺跡群の存在が重要である。沙流川流域においては令和6年度現在で127カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、旧石器時代から縄文時代を経て、中・近世、そして現代に至るまで、連綿と人間の営みが続いてきた。

たとえば、二風谷のイルエカシ遺跡では、平地式住居による近世の集落が調査されている。また、安政五（1858）年の松浦武四郎の記録では、平取町内で十数カ所のコタン（集落）と900人台後半のアイヌ人口が記録されている。これらのコタンの所在地とその共同体が利用する区域の境界は、現在の集落分布や字界と概ね一致する 경우가多く、アイヌの共同体による土地、資源などの利用が、ある程度の連続性をもちながら近・現代へと移行してきたことを示唆している。

明治政府による北海道開拓は、アイヌの生活基盤の維持や文化継承をより難しくさせた。その後の日本の近代化による様々な施策の中でも、地域の農業基盤や教育環境の整備が進められてきた。そうした中においても二風谷は近・現代におけるアイヌ研究の拠点的地域となってきた。

現代においては、地域住民の積極的な働きかけによるアイヌ文化継承の機運が高まり、昭和47（1972）年に北海道ウタリ協会（当時）の運営による二風谷アイヌ文化資料館が開館した。その後、昭和58（1983）年には平取町二風谷アイヌ語教室の前身である二風谷アイヌ語塾が開講され、同年に平取アイヌ文化保存会も組織された。こうしたさまざまな活動の積み重ねにより、伝統的生活用具や工芸品の制作技術、チプサンケ（舟おろし）の儀式、アイヌ古式舞踊（こしきぶよう）やユカラ（英雄叙事詩）などが地域に受け継がれることとなった。

また、平取町では平成中期以降、アイヌ文化継承のさらなる振興を図るため、自然との共生と多文化共生を基調とした「伝統的生活空間（イオル）整備構想」を推進している。この構想は、かつてのアイヌがコタンごとの生活領域を「IWOR(イウォロ)」と位置づけていたという歴史性をふまえたものであり、流域の原風景の再生・保全につながる、地域の文化的景観の価値と保存活用の考え方を共有する構想と言える。

沙流川流域の景観は、アイヌの伝統を基層にしつつ、多様な文化的起源・系譜を背景にもつ人々による開拓の営為などが重層的に加わっている。現代の官民協働によるアイヌ文化継承の取り組みは、長い歳月をかけて流域に蓄積されてきたさまざまな文化資源を保全継承することにより、独自の地域性を築いてきた。

### ③ 社会的特性

沙流川流域では、アイヌ語地名や伝統工芸、林業や農業といった多様な文化的営みが地域の風景と結びつき、現在の景観の形成に寄与してきた。

地形と、その場所の景観とも深い関わるアイヌ語地名は、平取町においてはその発音と語義などを継承し、保全を図ろうという努力が、住民活動、行政的文化施策の両面において様々に続けられてきた。たとえば、「ピラウトゥル＝崖の間（の地）」は町名「びらとり」の由来であり、この地域ではもっとも実生活で馴染んで使われているアイヌ語地名である。アイヌ語を元にした和風表記のものを含む地名は、さまざまな名勝地、伝承地と共に、この地域の人々が世代を超えて蓄積し、受け継いできた景観に対する意識・情報（景観認知）を知るための貴重な手がかりである。

平取本町にある義経神社は、寛政 10（1798）年に平取を訪れた幕吏・近藤重蔵により祠が設けられ、御神像が奉祀されたとされる。当時は、幕府による蝦夷地の直轄化が段階的に進められ、蝦夷地をめぐる対外的な緊張関係が高まっていた時期であり、そのような背景のなかで、平取に義経崇拜の一拠点が築かれた。その後、ペンリウクによって御神像が保護され、地元と神社との関わりが深まっていった。昭和 36（1961）年に現社殿の新設と、結婚式場などに使う義経会館が開館した。平成 2（1990）年には義経会館が改修され、義経資料館として再オープンしている。

平取町二風谷は、「アイヌ文化の里」としての整備が進められ、二風谷コタンを構成する博物館や資料館、チセ（家）群が立ち並ぶ特徴的な景観が広がっている。二風谷コタンはアイヌ文化の学習や研究のために来訪者が多数往来し、交流する結節点である。また、アイヌ工芸品の制作・販売の拠点でもあり、地域に受け継がれるものづくりの技術は、山林や河畔から調達する自然資源を素材として育まれたものである。食文化の面からも、多くの町民が近在の里山的自然から食用植物などを得ており、環境の維持再生は住民の重要な関心事である。

平成 25（2013）年に北海道で初めて伝統的工芸品に指定された「二風谷イタ」と「二風谷アットゥシ」は、アイヌの伝統技法と素材利用が現代まで継承されている証として評価さ

れたものである。重要有形民俗文化財である平取町立二風谷アイヌ文化博物館及び萱野茂二風谷アイヌ資料館所蔵の「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」(1,121点)は、地域の自然、歴史、生活・生業の諸要素とそれらの複合的関連性を示す資料群として貴重である。

明治から大正にかけて、製紙業（王子製紙など）におけるパルプ原料供給のため、森林の伐採が活発となった。原木は沙流川へ投入され、散流で下流へと運んでいたが、大正10(1921)年頃から筏流しが行われるようになった。沙流川流域の針葉樹（マツ類）は家屋材として、広葉樹（ナラ、カツラなど）はインチ材や家具材、楽器材として重用され、ヨーロッパにも輸出されていた。シナノキはベニヤなどに利用され、振内町には三晃合板というベニヤ工場があった。その他、地域にオガタン工場やナラの合板製スキー工場などあり、昭和43(1968)年には平取町内の工業出荷額の約95%を「木材・木製品」が占めるなど、当時は木材加工業が重要な産業であった。

平取町における近代の馬産は軍馬、農耕馬の生産を林間放牧で行ってきた。家畜の過放牧はすずらんの群生化を促し、独特な植生景観を育んできた。また、昭和中期から牧野の草地化を進めて和牛生産を開始し、以後生産・流通体制の整備を続けることによって「びらとり和牛」として市場に定着させてきた。

昭和20(1945)年以降は、平取町内各地で「戦後開拓」による食糧増産が進められた。そうした農地の多くは今日にも受け継がれて、当時の様子が色濃く残っている。地域のアイヌもこの営みに深く、場合によっては積極的に関与し、生活・生業を成り立たせてきた。昭和40年代の減反政策以降は、様々な施行を経てトマト栽培への転作が進められた。トマト栽培は、今では平取町を支える基幹産業となっており、トマトのビニールハウス群は、産業の歴史を知るうえでも貴重な施設となっている。

## 2-3 文化的景観の本質的価値

※ 下線は文化的景観を説明する上で欠くことのできない景観要素(不動産)を示し、三重下線は文化的景観の価値に欠かせない動産・無形要素を示す。

沙流川流域に広がる文化的景観は、単なる自然や人為的営為の痕跡にとどまらず、アイヌが自然と共生しながら築いてきた生活空間、精神文化や歴史を重層的に現わしている。以下では、そうした文化的景観の本質的な価値について、その構造と特徴を通じて説明する。

### ■ 文化的景観としての価値

日高山脈の最高峰であるポロシリ付近を源とする額平川と沙流川がつくり出す文化的景観は、日高山脈西麓に広がる特異な自然環境を基盤として、先史時代以降の人の営みによって重層的に形成されてきた。その希有な景観は、アイヌの精神文化およびイウオロという伝統

的な生活領域を通して理解できる。その価値の本質は、アイヌのコミュニティが、伝統を守りながらも新たな環境変化や様々な生業の転換に適応し、現代の多様なコミュニティとともにこの地での暮らしを築いていることに見出すことができる。

この文化的景観は、

- ① 基盤となる自然景観要素の層
- ② 近世後半のアイヌ文化が形成される以前の人間の居住を示す景観要素の層
- ③ 近世後半以降の史料や諸記録、住民が継承してきたアイヌ文化の景観要素の層
- ④ 近代以降にアイヌと和人の協働やそれぞれの取組によりつくられた景観要素の層
- ⑤ アイヌ文化の再生と復興に関わる取組を示す景観要素の層

が展開する多文化の積層。つまり、アイヌの過去から未来にわたる歴史を俯瞰できる景観であり、これらの景観要素は現代に継承されて存在するものである。重要文化的景観の保護すべき重要な構成要素としては、①～④の評価が定まった要素から取り上げ、⑤については、これからのアイヌ文化と現代社会の共生の先にある未来の文化的景観を創造する要素として積極的に評価し活用する。

#### ※注：積層する多文化を示す景観要素の例

- ①基盤となる自然景観要素の層

要素の例：地形、地質、植生など

- ②近世後半のアイヌ文化が形成される以前の人間の居住を示す景観要素の層

要素の例：埋蔵文化財包蔵地、チャシ跡、アオトラ石露頭地など

- ③近世後半以降の史料や諸記録、住民が継承してきたアイヌ文化の景観要素の層

要素の例：アイヌ伝承地、コタンの生活道路、峠越えの道、アイヌ語地名など

- ④近代以降にアイヌと和人の協働やそれぞれの取組によりつくられた景観要素の層

要素の例：牧野、植林地や雑木林、頭首工、旧マンロー邸、記念碑、義経神社など

- ⑤アイヌ文化の再生と復興に関わる取組を示す景観要素の層

要素の例：博物館、イオルの森、イオル水辺空間、ノカピライウオロ標本園、二風谷コタンなど

#### ■文化的景観の基盤となる自然環境

日高山脈最高峰のポロシリ付近を源とし、南西麓を流れて太平洋へと注ぐシシリムカは、沙流川流域を指すアイヌ語の雅語表現で「本当に・あたり・つまる、塞ぐ・させる」ことを意味する。上流域では、河川勾配が急で深い溪谷をつくり、中流域からは比較的勾配が緩く河岸段丘が見られる。下流域ではさらに河川勾配が緩く、広い蛇行原（低地）が発達する。

当地の地質は、第三紀層や白亜紀の堆積岩で構成され、このうち礫岩層に当たるところは、周囲よりも硬い部分で侵食されず崖になっている。二風谷湖右岸上流にみられる尾根筋と岩

壁はこれにあたる。また、オキクルミのチャシ及びムイノカがある額平川下流の左岸、チノミシリがある額平川上流の平取ダム付近など、地質に規定される独特の景観が存在する。多くのアイヌ伝承をもつ地形は、当地を特徴付ける景観要素として欠かせないものである。

## ■ 沙流川流域の居住適地としての自然資源

沙流川や町域の約 86%を占める森林は、クマやシカ、サケなどをはじめとする生物の生息域となっている。残りの約 14%は、沙流川流域の氾濫原や低位の河岸段丘が主となっている。アイヌのコタンは水害等のリスクを避け、ポンナイやソラッキなどと呼ばれる湧水を利用するために、河岸段丘上に集落を形成してきた。それを継承するように、現代の農地や市街地も河岸段丘上に立地している。

日高山脈の自然資源である岩石資源は、縄文時代から利用されていたことが分かっている。アオトラ石と呼ばれる緑色岩が石斧の素材として利用され、遠隔地へも運ばれていた。近代から現代においては、沙流川、額平川の中・上流域に分布する蛇紋岩地帯のクロム鉱石が採掘された歴史もある。また、河川上流の白亜紀層などから採れる青や赤の岩石、幸太郎沢で産出する「幸太郎石」は、現代でも銘石として造園や工芸品などに利用されている。

## ■ 沙流川流域とアイヌの関係

アイヌの主要な食材利用は魚類であることから分かるように、河川とアイヌとの関係は深い。沙流川流域はシロザケやサクラマス等が産卵のために遡上し、アイヌの生活を支える漁場でもあった。また、現在はチプサンケ（舟おろし祭）などの舞台となる文化継承の場としても重要である。

河畔林には、初期には短寿命（30年程度）のヤナギ類、ハンノキなどの樹種が生育するが、やがて長寿命（200年程度）のハルニレ林となっていく。ハルニレ林の林床ではオオウバユリ等、アイヌ文化において伝統的に利用される植物が多数生育しており、いわばアイヌにとって衣食の倉庫のような場所である。多くのハルニレ林は農地化により失われたが、川沿いには今もヤナギやヤマハンノキの河畔林が生育し、将来のハルニレ林へとつながる素地をもった景観がある。

沙流川流域の河川において、堆積岩で形成されている山地斜面が風化して崩落を繰り返し、部分的にハルニレ林の林床が荒廃して有用植物資源が枯渇してしまう現象は、アイヌ語で moshir - eru - ushi（モシリ エル ウシ）と呼ばれる。アイヌが川と森の関係を認識し、このサイクルの中で生活したことは、沙流川流域の文化的景観の価値を示す大きな要素である。

また、かつての沙流川沿いには毎年の雪解け増水による浸食と堆積により、多くの洲が形成された。こうした洲で雑穀の耕作を行う「川洲畑」という農耕を生み出し、幕末安政五（1858）年の松浦武四郎の記録にある、900人台後半が流域に暮らす生活圏が築かれた。

## ■ アイヌが生活空間としてのイウオロに見出した景観

アイヌは河岸段丘上で生活用水を確保できる場所にコタン（集落）を形成し、近隣の沢とそれを取り囲む尾根筋に囲まれた地形をイウォロという生活の単位とした。泉靖一が地域住民から聞き取りを基にした研究により、かつて、現在の平取町域を含む沙流川流域が、16のイウォロで構成されていたことが知られている。イウォロは生活の糧を得る空間として用いると同時に、コタン毎の自治が行われる領域でもある。その地形や自然の性質を熟知し、知識として継承することで、もたらされる恵みを持続的に利用することができた。それらの知恵は、地形や動植物の生息域を示すアイヌ語地名としても詳細に刻まれている。

近世以降、様々な形で記録されてきたコタンの領域は、現在の集落分布や字界と近似することが多い。一部の道路は「コタン通り」とも呼ばれ、現在でも当時の線形が維持されている。松浦武四郎の記録によれば、沙流川の河口域から内陸にかけて数キロおきにコタンが形成されており、北海道内の他の河川と比較してもその規模は大きい。サケの遡上数は他のコタンが形成された川と比して少ないとの記録もあるが、流域住民の食料として捕獲する分には十分な資源量であったとみられる。このことと合わせ、近世後半の沙流川流域では、雑穀や野菜等の積極的な栽培、狩猟、漁猟、採集といった複合的な食材確保が行われていたと考えられる。

生活領域の森林は、近代以降の伐採と植林によって大径木が減少したものの、植林地以外において森林を構成する樹種は比較的維持されている。またイウォロを形成する地形の特徴は今もその姿を留めている。

## ■アイヌの精神文化を通して見る自然環境と景観構造

沙流川流域には、アイヌの伝統的な自然観、あるいはコスモロジー（宇宙観・環境観）が、それを育んだ空間的な広がりとともに残され、そしてそれらの保全活用を図るための努力が続けられている。

カムイはカムイモシリ（神の国）から自然現象や動植物などに姿を変え、アイヌモシリ（人間の国）にやってくると考えられている。アイヌは、カムイから生きていくために必要な恵みを頂き、その魂を祈りとともにカムイモシリへ送り返す。このカムイへ祈りを捧げる精神文化がアイヌに受け継がれており、来訪者が沙流川流域の文化的景観をより深く理解することを可能にしている。

サルンクル（沙流川の人）にとって、ポロシリ山頂やその周辺の環境は、カムイたちが集う「神の世界」であり、ポロシルンカムイ（ポロシリの神）をパセオンカミ（重い礼拝）の祭神とするコタンも多い。現在の文化継承の中でも、ポロシルンカムイへの祈りの姿をたびたび見ることができる。口承文芸の中にもたびたび登場するポロシリは、アイヌのコスモロジーを示す文化的景観を理解する上で欠くことのできない景観要素である。また、沙流川流域は人文神オキクルミを崇拝する地域と言われている。オプシヌプリ（通称穴あき岩）やウカエロシキ（通称熊の姿岩）、オキクルミのチャシ及びムイノカ（オキクルミの居城及び箕の形象）と呼ばれる特別な姿をとる岩山やチャシ等に住民の想いを宿している。また、チノ

ミシリ（我ら・祈る・所）とされる祈りの場もアイヌのコスモロジーを示す文化的景観要素と言える。

住民によって育まれた自然観や空間認識は、豊かな精神世界と口承文芸を培った。様々に伝えられるウパシクマ（言い伝え）やアイヌ語地名は、アイヌがどのように川や森などの自然と向き合ってきたかを伝える貴重な景観認知資料である。

コスモロジーを支えるポロシリやチノミシリなどの景観要素、そしてそこに捧げられる祈りや儀式もまた、生活・生業の一部と捉えることができる。祈りや儀式は、資源採取を継続していくため、そしてコタンでの社会生活を成り立たせていくためにも必要な要素であった。

以上より、次のような「全体」と「部分」から成り立つ2段階の景観の構造をもって、四次選定における文化的景観を説明する柱とする。すなわち、ポロシリを起点（源流域）とし、額平川・沙流川を骨格とする流域全体の景観がまずあり、そこに部分として個々のコタンのイウオロが景観を構成する単位として展開したという構造である。

アイヌの日常生活や狩猟採集を通じたカムイとの関わり（交流）は、この個々のイウオロを単位として展開された。その一方で、他地域との交流やサルンクルとしての共同体意識及び資源の相互利用は、沙流川河口域や上流の遠い山奥のイウオロやポロシリにまで活動や祈りの対象を広げていたであろう。当該文化的景観は、そうしたアイヌのコスモロジーに基づく景観構造によって特徴づけられる。

## ■近代以降にアイヌと和人の協働やそれぞれの努力によりつくられた景観

近代開拓以降、学校などの社会基盤の導入や、社会経済的变化による様々な産業がもたらされた。アイヌを含む地域住民は、新たな社会基盤や産業を取り入れ、その振興に従事しながら生活を営んだ。沙流川流域では、農林業、鉱業等の生業が展開しながら現在の基幹産業である農林業へと移り変わってきた。

こうした近代開拓がもたらした景観の中でも、沙流川下流域の農業生産に画期的な増産をもたらした頭首工は、今日もその姿を留める重要な構成要素である。松浦武四郎は沙流川の景観について「夷地の心地なし」と記し、沙流川流域のアイヌが積極的に農耕していたことを記録している。現在は、川と農地が堤防で隔てられてはいるものの、沙流川沿いの土地から恩恵を受けていることに変わりはない。

額平川流域の芽生地域に形成された河岸段丘には、近代以降の産業形成に伴う牧野が広がっている。牧野林は、軍馬や農耕馬等の牧畜を目的とした林間放牧の過程で生まれた森林利用の形態である。北海道の寡雪地帯では、冬期においても馬の餌となるエゾミヤコザサは分布するため、山野に馬を粗放的に放牧する林間放牧が発達した。笹や野草の生育面積を増やすために適時伐採が行われたが、馬を直射日光から守るために放牧地の中に日陰樹を点在させる手法が採られた。これにより、笹類の草原にカシワやハルニレなどの巨木が残る独特な景観が形成された。牧野林はかつて根室や釧路地域などにも広がっていたが、多くは放置されて森林に戻り、あるいは外国産種子の播種によって人工的な牧草地へと変化した。馬から

牛への転換が行われたが、日陰樹の残る大規模な風景は、日高地方に残るものが最大規模である。牧野林において、馬が食べない植物が残されることにより形成された景観の一つがすずらん群生地である。

明治末頃から三井物産や王子製紙等による本格的な造材が始まった。沙流川では昭和 29 (1954) 年まで流送と呼ばれる河川を利用して木材を流す運搬方法が用いられ、枕木などの用材や製紙原料として出荷された。農閑期に造材仕事に従事する農家も多く、造材飯場や流送飯場が栄えた。民有林では効率性を重視し皆伐を行ったため落葉広葉樹林へ変容していった一方、国有林では利用できる木から抜き伐りを行ったため、樹木が小型化したものの針広混交林の景観が現在も維持されている。

近代以降に形成された市街地の多くが、幕末期のコタンの立地を引き継いでいることは、沙流川流域の景観的価値を語る上で重要な視点である。とりわけ、現在の平取町役場が所在する本町地区は、幕末期に最も人口が多かったピラウトウルコタンの立地を継承した市街地である。さらに、近代以前からこの地に鎮座する義経神社の歴史などからも、幕末以降のピラウトウルコタンが、アイヌを含む平取町の地域社会において中心かつ重要な役割を果たしていたことがうかがえる。

#### ■アイヌ文化に関する世界的な情報発信拠点

平取町の特筆すべき点は、アイヌ文化に関する世界的な情報発信拠点として重要な役割を担っている点である。金田一京助は沙流川流域において体系的にユカラ (英雄叙事詩)を収集し、スコットランド国立博物館や大英博物館・王立人類学研究所にアイヌ文化に関連する多くの資料を提供したニール・ゴードン・マンローは、帰化後に二風谷に移住し、永眠している。

さらに、二風谷出身のアイヌで民俗学者の萱野茂が収集したアイヌの民具は、「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として、平成 14 (2002) 年度に重要有形民俗文化財と指定され、平取町立二風谷アイヌ文化博物館と萱野茂二風谷アイヌ資料館に所蔵されている。また、アイヌ語に関する情報収集・発信活動の拠点である二風谷子ども図書館 (1980 年代以降、萱野茂が地域住民に向けて始めたアイヌ語教室の建物) が、萱野茂二風谷アイヌ資料館に隣接して現存しており貴重である。

アイヌ文化を核としてさまざまな人や知識が北海道を往来し、平取町が情報集積地として顕著な場所性をもつことは、町内に点在する記念碑等が物語っており、文化的景観の価値を示す要素の一つである。

#### ■アイヌ文化の再生と復興に関わる取組を示す景観～未来の文化的景観を創造する

近代以降、新たな産業の発展にともない景観が変化する中で、アイヌの文化が様々なかたちを通じて継承され発展してきた。それは、沙流川流域における多文化共生の歴史でもある。

近年では、かつて生息していたコタンコロカムイ（シマフクロウ）が再び生活できる森を目指す「21世紀アイヌ文化伝承の森再生計画 - コタンコロカムイの森づくり推進のための協定書 -」に基づく施策が進められている。この取組では、官民が一体となって伝統素材を積極的に育成すること、特にアットウシの素材となるオヒョウニレの残存木の保護と植樹による資源回復が主要な課題となっている。

こうした植物資源の回復とともに伝統的狩猟文化の今日的継承や、伝統的工芸品である「二風谷イタ」、「二風谷アットウシ」の振興にも取り組んでいる。また、これらの継承活動から得られた知見をもとに、来訪者に対してアイヌ文化を解説するガイド人材の育成も行われている。

また、北海道開発局と連携した河川やダムにかかわる調査・整備事業を契機として、アイヌ文化にとって有用な水生植物が育つ環境づくり（イオル水辺空間）や川洲畑の実践、チプサンケを継承していくための整備等、アイヌ文化の継承にとって必要な環境づくりも行われている。とくに平取ダム近傍に所在するノカピライウオロ・ビジターセンターや周辺のフットパス、ノカピライウオロ標本園は、ダム建設を機に開発主体（開発局）がアイヌとの共生をめざして整備したもので、アイヌ文化を学ぶための屋内外の空間として機能する。

森林や水辺等の環境再生には時間がかかるが、こうしたアイヌ文化復興の取組がつくり出してきた景観、そして復興の取組そのものが、沙流川流域の文化的景観の大きな特徴となっている。

以上のように、「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」は、この地で自然と共に生きてきた人々の叡知を示すアイヌの伝統文化とコスモロジーを、開拓期以降の農林業に伴う土地利用とともに目にすることができる、きわめて貴重な景観である。

## 第3章 文化的景観保存活用の基本方針

### 3-1 基本方針

河川、河畔林等を含む低地・河岸段丘、そして山地に広がる森林という構造と、それらと集落との関係性が「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」の重要な骨格を形成している。平取町においては、こうした景観のコアになる構造が残されている一方、これらの土地を利用してきた地域共同体の生活・生業は時代とともに変化してきている。本計画では、受け継がれてきたアイヌ文化を継承するため、第4章で特定する重要な構成要素等の保護とともに、失われた環境の回復や、現代的・将来的な暮らしに対応させた土地利用の方針を定める。

将来にわたって文化的景観の価値を継承していくための文化的景観の保存・活用と運営体制に関する基本方針は以下である。

### 3-2 保存・活用に関する観点

#### (1) アイヌのコスモロジーの継承

沙流川流域のアイヌの伝統文化とコスモロジーは、ポロシリなどの伝承地、沙流川や額平川、その他支流を含む河川、その河川の侵食作用により形成された特徴的な地形、その上に生育する動植物などの自然環境を、「イウォロ（伝統的生活空間）」というアイヌ固有の空間概念を通して見ることで理解できる。この文化的景観の骨格を成す自然環境を、今後も持続的に生態系サービスを楽しむよう保全・回復することで、アイヌの自然に対する文化的なまなざしを継承することを基本理念とする。

#### (2) 地形に対応した土地利用の保全と継承

この地に暮らしてきた人々は、沙流川流域に形成された特徴的な地形や自然環境を活用し生活してきたことがわかっている。アイヌによる利用はもちろんのこと、近代以降の生業も、過去の土地利用を引き継ぎながらその土地土地での地形を含む自然環境を合理的に利用してきた結果である。今後においても、文化的に重要な要素を保全しながら、過去の土地利用の履歴から得られる景観の情報を尊重しつつ、時代に適応した土地利用をめざす。

### 3-3 運営体制に関する観点

#### (1) 多様な関係者との連携推進

本計画を、文化財の保護に留まらず、文化財を活用したまちづくりの計画として位置付け、

その運営は、行政部局間の連携はもちろんのこと地域住民及び関係団体をふくめた地域共同体の連携に基づくものとする。

また、北海道で唯一の重要文化的景観選定地であり、かつアイヌ文化を理解することのできる景観が残されている地域として、地域外のアイヌ文化関連団体や自治体、教育研究機関、文化・観光振興等に関わる企業と連携するなど、広くアイヌ文化に対する理解を促進するための体制の構築を目指す。

## (2) 文化的景観の理解促進と担い手育成

普及啓発を行うことで、多様な連携を行う上で必要となる本文化的景観の理解促進を図る。特に、地域住民の文化的景観に対する理解を深めることを通じて、その運営の基盤となる地域共同体の体制強化に努め、地域住民等の生活、生業、その他の活動が、文化的景観を意識した総合的な景観づくりに結びつくことを目指し、担い手育成を特に重要かつ継続的な課題として取り組むこととする。

## 第4章 景観保存・形成の方針

### 4-1 文化的景観の構造

#### (1) 文化的景観の構造的把握

本計画では、文化的景観の保存・形成の方針を定めるにあたり、本文化的景観の構造を、地形分類と構成要素の関係性及び「イウォロ（伝統的生活空間）」というアイヌの持つ固有の空間概念から捉える。

#### (2) 地形分類と構成要素との関係

日高山脈とそこに流れる沙流川水系は、長い歳月をかけてこの地に特徴的な地形を形成した。本計画では対象地域の地形を、山地及び丘陵地など起伏の激しく多くが森林に覆われる「山地」、沙流川水系の河川作用によって形成され人々の居住の履歴が積層された「河岸段丘および低地」、これらの地形を造出した沙流川水系の「河川」の3つに分類する。そして、その地形上には第2章で述べた各景観レイヤーで整理される構成要素が一定の傾向をもって立地する。本項では、各構成要素の立地傾向と変遷から地形分類別の特徴を以下に示す。



図 4-1 重要文化的景観の対象範囲における地形分類

### ① 山地

沙流川流域の多くは起伏に富んだ山地であり、特に岩肌をみせる特徴的な地形に対しては数々のアイヌの伝承が残されている。特にポロシリ（幌尻岳）は、「カムイ オリパク モシリ」（神に遠慮する山）とされ、カムイミンタラ（神の庭）などの伝承が残されている。沙流川を遡るとポロシリに至る（実際は沙流川の源流は熊見山で、額平川は沙流川の支流）という伝承もあり、沙流川の源流のイメージであり、象徴的な存在（ランドマーク）であった。

また、山地のほとんどは森林におおわれており、アイヌの人々はこうした森林の恵みを利用し生活してきたことが知られている。コタンに近い山のみならず額平川上流域にまでアイヌ語地名を持つ沢の記録が残されており、古くから人の往来があったことが窺われる。近代開拓が行われるまでは、針広混交林と針葉樹林が山地の大部分を占めていたが、近代以降、国有林では択伐施業を行っていたため針広混交林が多く、民有地では皆伐を行っていたため落葉広葉樹林になり、終戦後には造林熱が高まり針葉樹植林地と姿を変えてきた。また全体的に規模が縮小し、上層木の量的変化がある一方で、森林の構成要素に大きな変化は見られない。

### ② 河岸段丘及び低地

沙流川流域では、山地から流れ堆積する土砂によって谷底の平坦な低地がつくられ、河川の浸食によって削られた崖の上には河岸段丘が形成されている。

河川および河川に隣接する河岸段丘および低地にはヤナギやハルニレなどの樹種により構成される河畔林・溪畔林が生育し、河川沿いの主要な構成要素であったが、ハルニレ林の生育する土地が農耕適地であるとされ、戦後に農地や牧草地へと変化した。現存する春楡林は稀少である。河岸段丘上に自生していた広葉樹林と針広混交林は、針葉樹の植林地や牧野林といった生業景観へと変化した。古くからある森林は、農耕不適地に部分的に残されている。

また、河岸段丘および低地では旧石器時代以降の遺跡が発掘されている。アイヌの人々もまた河岸段丘の斜面から湧き出る湧水を飲み水として利用し、付近にコタンを形成していたことが松浦武四郎の記録等からわかっている。また特徴的な形をした見晴らしのよい河岸段丘は、チャシとして利用されていた。近代以降には、コタンを引き継ぐかたちで市街地が形成され、博物館や資料館等のアイヌ文化や近代開拓の歴史の保全継承のための施設も立地する。いわば、古くから人々の居住・活動の履歴が積み重ねられてきた土地である。

### ③ 河川

河川は、日高山脈最高峰のポロシリを源流域とする額平川と熊見山を源流域とする沙流川、その他山地からこれらの河川に流れ込むいくつもの支流（沢）により構成される。

河川には、シロザケ、サクラマス、ウグイなどの多種多様な魚が存在し、アイヌの生活においては漁猟の場として重要なだけでなく、自生する河畔林での採集や、川州を利用した粗放的農業による植物資源の採取地としても活用されていた。支流は山に入る動線としても機

能した。沙流川流域のアイヌが自らを「サルンクル（沙流川の人）」と呼び、他の河川流域のアイヌからも同様に呼ばれたことは、河川が集団アイデンティティにつながる重要なものであることを示す一例である。生活に密接にかかわるアイヌ語地名が多く現代に引き継がれているのも河川であり、コタンの名称も河川の名に由来するものが多い。

近代開拓期には、河川から農業用水を確保するために頭首工が建設され、この地の近代農業の発展を支えた要素として現存している。

昭和後期から始まった沙流川総合開発事業にり、一部河川環境は大きく改変されたものの、近年では、本町地区にある水辺空間ではかつての河川敷における植生の復元の活動が、芽生地区のノカピライウオロ標本園では伝統的有用植物の植生回復へ向けた試験栽培等の活動が行われており、アイヌが伝統的に利用してきた自然素材の育成事業が行われている。

### (3) 生活空間単位としてのイウオロ

アイヌの人々は「イウオロ」という生活空間単位概念を持っていたとされる。泉靖一（1951）は、イウオロを2つの視点から整理している。

一つは、狩場としての意味である。大まかに「Kim・un・iwor（山の狩採集場）」と「pet・un・iwor（川の漁場）」、「repun・un・iwor（海）」に分けられていた。また、「Kim・un・iwor（山の狩採集場）」には、コタンに近いところから非常に遠いところの3段階の区別があり、「pet・un・iwor（川の漁場）」は、浅い瀬と流れのある深いところに分けられている。「repun・un・iwor（海）」にも4つの区別が存在している。このようにアイヌの人々は、コタンと自然環境の間の空間を段階的に認識していたことが知られている。

もう一つは領域的な概念である。アイヌの人々は、沙流川流域全体を「Sar・un・kur iwor」と呼んでいた。恒常的に全体を統治する機能はなかったが、他地域との闘争時に統制されることがあったといわれている。また「Sar・un・kur iwor」は、各コタンが自然資源を得ることのできる範囲を取り決めたコタンごとのイウオロの領域が設定されていたことがわかっている。ただし、コタンのイウオロは固定されたものではなく、コタンの移動や新設・消滅による変動の他、様々な事情によりコタンどうしで取引が行われた履歴もあると考えられている。

特にコタンのイウオロという領域的な概念からは、アイヌの人々がコタンを中心にして生活した空間の単位を読み取ることができ、これは景観からアイヌ文化を理解する上で重要な視点である。そこで本計画では、このコタンのイウオロを景観単位として設定し、景観の特徴把握及び保全方針を定める。

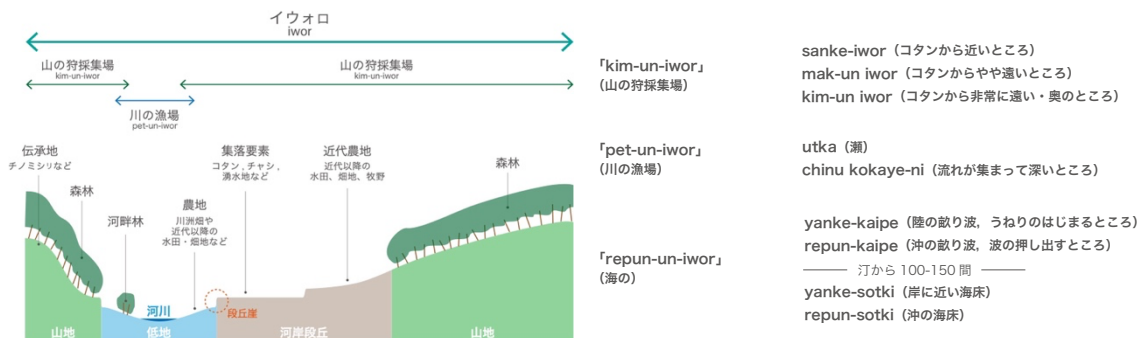
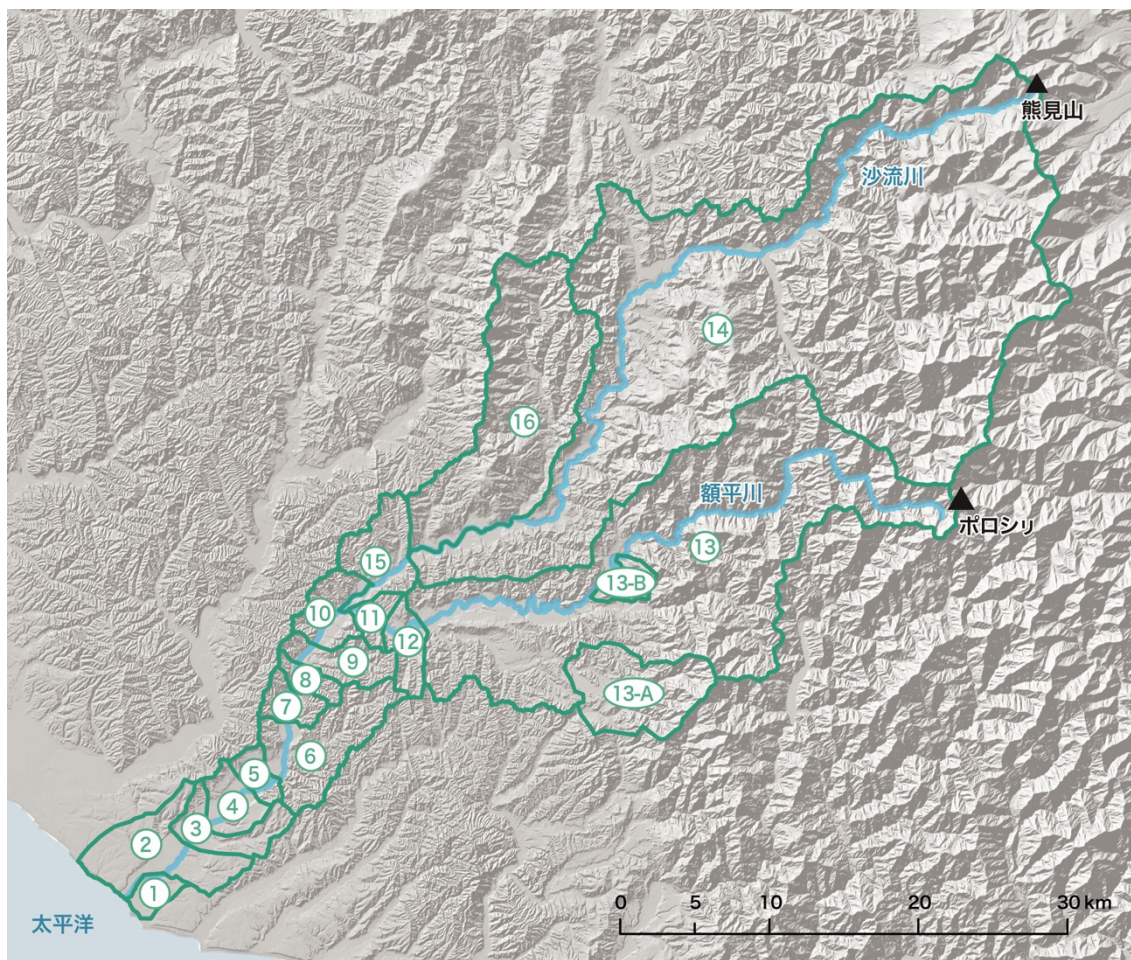


図 4-2 イウォロの概念図



Sar-un-kur iworo

- |                  |                |                        |
|------------------|----------------|------------------------|
| ① ピタルバコタンのイウォロ   | ⑦ ニブタニコタンのイウォロ | ⑬ ヌフキベッコタンのイウォロ        |
| ② ビラカコタンのイウォロ    | ⑧ ビバウシコタンのイウォロ | ⑬-A 外来者に譲渡したイウォロ       |
| ③ シムウンコッコタンのイウォロ | ⑨ カンカンコタンのイウォロ | ⑬-B ニイカブ川の人から譲り受けたイウォロ |
| ④ サルバコタンのイウォロ    | ⑩ ペナコリコタンのイウォロ | ⑭ ポロサルコタンのイウォロ         |
| ⑤ ニナコタンのイウォロ     | ⑪ シケレベコタンのイウォロ | ⑮ オサツナイコタンのイウォロ        |
| ⑥ ビラウトゥルコタンのイウォロ | ⑫ ニオイコタンのイウォロ  | ⑯ オウコツナイコタンのイウォロ       |

図 4-3 コタンのイウォロ

※コタンごとのイウォロの領域を泉靖一氏の論文に掲載されている地図資料から、記載された河川とイウォロ境界ラインの関係性をもとに、現状の DEM データ (10m) から算出した集水域を手がかりとして特定した。

## 4-2 各景観単位の景観の特徴

前節における文化的景観の構造の整理をもとに、平取町における文化的景観の景観単位を図 4-4 に示すコタンのイウォロ別に設定する。ただし、ヌブキペッコタンのイウォロについては、額平川源流域の森林地域（現在の国有林）とその手前の河岸段丘の広がる地域とで景観の特徴及びその文化的位置付けに違いがあるため分割する。また、ピラウトウルコタンのイウォロから下流については、沙流川の河川区域を、特に欠くことのできない範囲として抽出した。それぞれの景観単位の特徴は以下の通りである。

表 4-1 景観単位の区分と面積

番号	景観単位名	面積 ha
VI	ピラウトウルコタンのイウォロ	4070.9
VII	ニプタニコタンのイウォロ	995.7
VIII	ピパウシコタンのイウォロ	709.9
IX	カンカンコタンのイウォロ	1689.9
X	ペナコロコタンのイウォロ	1734.8
XI	シケレペコタンのイウォロ	677.3
XII	ニオイコタンのイウォロ	1281.5
X III-1	ヌブキペッコタンのイウォロ-1	8303.7
X III-2	ヌブキペッコタンのイウォロ-2	21045.0
III～V	ニナ、サルバ、シュムウンコッコタンのイウォロ（河川区域のみ）	408.8

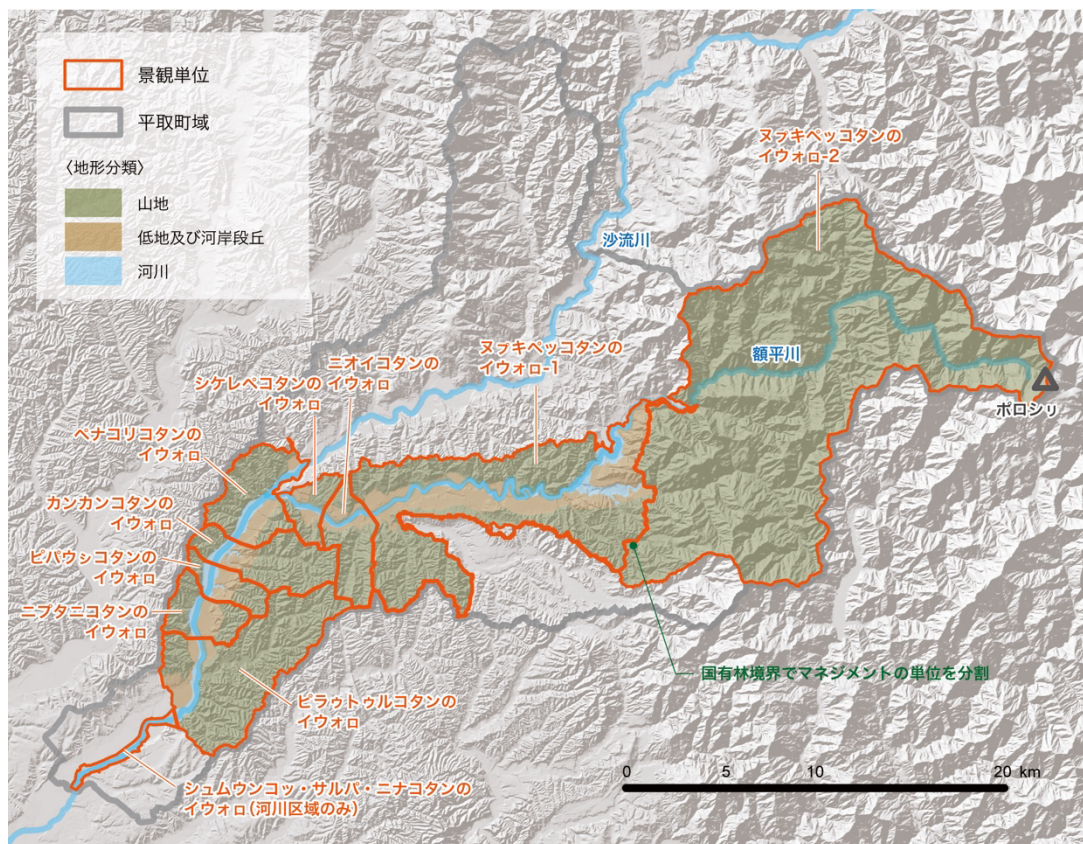


図 4-4 重要文化的景観の景観単位

### (1) VI ピラウトウルコタンのイウォロ

ピラウトウルコタンのイウォロは、現在の本町と小平の立地する場所に位置する。ハヨピラとピラウトウルレレケと呼ばれるオキクルミのチノミシリが沙流川の両岸に聳える狭まった崖地から河口に向けて低地が広がっていく地形的な変化点に位置する。アベツ沢はこの地点で合流し、その流域に広がる比較的広い集水域の森林がこのイウォロに含まれるため、隣接するイウォロと比較すると面積的に広がっている。このアベツ上流の国有林では、「21世紀アイヌ文化伝承の森事業（2019-）」によるアイヌ文化の有用植物の育成実験が行われている。オキクルミの伝承が多く残されている地域でもあり、義経神社など歴史的に重要な要素も立地する。

このイウォロの沙流川右岸に形成された河岸段丘上には、松浦武四郎の調査（安政5〔1858〕年）によれば、沙流川流域で人口の最も多かったコタンが立地し、現在はそれを引き継ぐかたちで平取町の中心市街地が形成されている。

河川空間は比較的広く、現在では河川敷においてアイヌ文化の有用植物であるガマの育成など、イオル再生事業の実践が行われている。

### (2) VII ニプタニコタンのイウォロ

現在の字としての二風谷は、3つのコタン（ニプタニコタン、ピパウシコタン、カンカンコタン）から成る。これは松浦武四郎が調査した安政5（1858）年の記録上も同様であり、3つのコタンを合わせて「ニプタニ村」としている。

ニプタニコタンのイウォロは、二風谷ダムにより形成されたにぶたに湖と本町との間に位置するエリアであり、河川の蛇行により形成された比較的広い河川空間が広がる。沙流川左岸の河岸段丘は、農地や牧場などの生業の場として広く活用されている。特に農業用水の確保を目的として建設された沙流川頭首工は、近代開拓と農耕の歴史を物語るシンボリックな構成要素である。

### (3) VIII ピパウシコタンのイウォロ

ピパウシコタンのイウォロは、二風谷ダムの堤体とにぶたに湖が立地するエリアである。ダムの建設により河床が高くなり農地の水没などの変化はあったが、沙流川右岸の山々と、左岸の河岸段丘と背後の山地という大きな地形的関係は、古くからの様子をとどめている。

沙流川左岸の比較的広い河岸段丘上には集落跡を含む多くの遺跡が発掘されており、近代以降には、旧マンロー邸や、旧青年図書館、二風谷こども図書館、二風谷コタンや二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂アイヌ資料館が立地するなど、アイヌ文化継承の拠点地区である。

段丘の対岸（右岸）には、標高の低く谷筋の多くある山々が連続し、岩肌が見える特徴的な場所においては、ウカエロシキ（通称熊の姿岩）などの伝承地が立地している。また右岸のイオルの森と名付けられた町有林や国有林では、「イオル再生事業」及び「21世紀アイ

ヌ文化伝承の森事業」における取り組みが行われている。

#### (4) IX カンカンコタンのイウォロ

カンカンコタンは、沙流川左岸のカンカン沢とマカウシの沢が合流して沙流川に注ぐ地点の河岸段丘上に形成された。この河岸段丘は、ピバウシコタンよりも小高く、比較的深い沢が二本合流するため、複雑な地形となっている。これらの段丘上では集落跡等の遺跡が発掘されており、ポンカンカンチャシ跡等保存状態の良いチャシ跡も残る。国道整備を除けば比較的周囲の開発が避けられた場所であり、遺跡地や伝承地等の地形的特徴を一体的に眺められるエリアとして希少である。コタンの立地した背後の山地には、「二風谷ファミリーランド」「びらとり温泉ゆから」という集客施設が整備され、沙流川まつりやPKグランプリ等のイベント開催もあり、町民を含めた訪問客は多い。さらに沢を登れば、アベツ沢上流の国有林につながる。

沙流川右岸には、低く連続した山々が並び、岩肌の見えた場所にはオプシヌプリ（通称穴あき岩）などの伝承地が立地する。夏至の前後にはオプシヌプリの穴に夕日が沈む光景を対岸のポンカンカンチャシ跡付近等から眺めることが可能であり、近代より前の自然地形的な景観構造を体感できる場所として特に重要である。

#### (5) X ペナコリコタンのイウォロ

松浦武四郎の記録による「ニヲイ村」は3つのコタン（ペナコリコタン、シケレペコタン、ニオイコタン）から成り、「ニフタニ村」との境には杭などが設置されていたと記載されている。現在の字としての荷負は上記3つのコタンのうちペナコリコタンからシケレペコタン辺りとなっており、ニオイコタンは字貫気別のエリアに含まれている。

ペナコリコタンは、沙流川左岸から流れ込むペナコレ川（ピラケシオマナイ）に注ぐ湧水と農耕に適した高台の平地を求め形成されたとされ、コタンが並んでいる写真等記録が残る道筋やソラッキ（湧水）、目標にもなっていた御神木などがまとまって残されている。松浦武四郎が訪れた際はコタンの移転前であり、ペナコリが意味する「川上の方へ・向う・道・の所」という解釈の通り、沙流川と額平川の合流点付近、つまり道の分岐点に位置するコタンであった。

このイウォロは、沙流川と額平川が合流する地点にあり、アイヌ語で二股を意味するペテウコピ（川が・そこで・互・に・捨て去る・所）と呼ばれる特徴的な河川景観が広がる。アイヌの考え方では、川は河口から源流に向かって流れる生き物だとされており、大河川の分岐点は重要な部分として敬意が払われており、地域住民に大切にされてきたアイヌの自然観を表す重要な場所である。

比較的標高が高くきれいな笠型をした山には、タブコブやイムチトヌプリなどの地名が残されている。

## (6) XI シケレペコタンのイウォロ

シケレペコタンは、額平川右岸のシケレペ沢沿いに立地したとされる。シケレペはキハダを指すアイヌ語であり、食用となる植物を示すアイヌ語地名である。チセ(家)が数軒並び、ムイノカが背後に移る写真が残されている。現在もバス停の名称は「スケレペ」であり、地域の通称もシケレペである。蛇行が特徴的な額平川流域のイウォロでは、河川兩岸の河岸段丘に一定の間隔でチャシ跡やコタン跡地が見つまっている。

シケレペコタンのイウォロの特に右岸は、河岸段丘が段々と形成され地形的に複雑である。左岸の山地は、礫岩質の山地が広がり、岩肌の見えた特徴的な岩山は、名勝ピリカノカにも指定されているオキクルミのチャシやムイノカなどの伝承地であり、神と人の交流伝承が残る。オキクルミのチャシとムイノカを望む視点場が設置されており重要である。

## (7) XII ニオイコタンのイウォロ

ニオイコタンは、松浦武四郎の調査によると額平川兩岸の河岸段丘上にヘンケニヨイコタンとハンケニヨイコタンとしてそれぞれ立地していたとされる。通称荷負本村と呼ばれる現在の市街地は額平川右岸のヘンケニヨイコタン跡地を引き継いだものであり、当時の道筋が生活道路として活用され、ポンナイ(湧水)も大切に守られている。ニオイコタンのイウォロの額平川左岸、ハンケニヨイコタンがあったと考えられる場所にはコタン名の由来の一説である荷負川が流れており、農地に囲まれた特徴的な形状のニオイチャシ跡やウンチャシ等にまつわる伝承が残されている。チャシ跡は額平川の兩岸の河岸段丘上に立地していたことがわかっており、他のイウォロに比べ道路から視認しやすい形状・位置に立地している。

集落の神社からは、ポロシリとそこから流れ出た額平川やニオイチャシ跡等を一体的に眺望することができ、沙流川流域のアイヌ文化の象徴であるポロシリの視点場として重要である。

## (8) XIII-1 ヌプキペッコタンのイウォロ-1

ヌプキペッコタンは、貫気別川の額平川との合流地点付近に立地したとされる。このコタンのイウォロは、ポロシリまでを含む広大なイウォロであったことが記録されている。コタンに近いイウォロと、ポロシリ源流域とは、その利用の仕方には違いがあったとされる。

コタンに近い現在の貫気別エリアには低地が広く広がり、近代開拓による主に水田景観が広がる。その上流の芽生においては額平川の蛇行により大きく侵食され険しい崖地が形成され、その河岸段丘上には牧野が広がる。特にこの芽生における林間放牧は、今日にいたっては、平取町を特徴づける代表的な文化的景観の一つであると言える牧野と牧野林、そしてすずらん群生地という重要な構成要素を形成することにつながった。

## (9) XIII-2 ヌプキペッコタンのイウォロ-2

ヌブキペッコタンのイウォロのうち、芽生やさらに奥地に広がる現在の国有林にあたるエリアは、入会地的に複数のコタンで共有利用していたと考えられている。この額平川の源流域には、原生的な森林景観が残された場所もある。また、縄文期に石斧の材料として青森を主として鎌倉（神奈川県）等広範囲に流通していたアオトラ石や、近代以降銘石として造園や工芸品等として活用されている幸太郎石など多種の岩石資源の採掘地でもある。

#### (10) Ⅲ シュムウンコッ・Ⅳ サルパ・Ⅴ ニナコタンのイウォロの河川

この景観単位については、各コタンのイウォロではなく、例外的にニナコタン、サルパコタン、シュムウンコッコタンの3つのイウォロの河川空間をまとめた単位としている。アイヌ文化の象徴であるポロシリを源流とする額平川と、その合流後に河口に向けて流れる沙流川は、平取町においてアイヌ文化を育んだ要素として重要なものであり、それらを連続した選定範囲として特定する。この河川エリアは、上流側に比べて川幅が広がり、左岸側は海成段丘による崖が、右岸側は低地が広く展開している点に特徴がある。河川沿いには、明治11（1878）年に平取を訪れた英国の旅行家イザベラバードが歩いた道の記録をもとにフットパスコースが設置され、フリと呼ばれる怪鳥の伝承地などが残されている。

## 4-3 土地利用と景観形成の方針

### (1) 地形分類別の方針・考慮事項

#### ① 山地

山地は、伝承地にまつわる地形の形態的特徴やそこに生育している森林生態系を崩さないよう、その基盤である土地の形質を保全する。森林については、土地所有者それぞれの意向をもとに、森林生態系が多面的機能を発揮し人々が生態系サービスを持続的に享受できるよう管理・施業または利用しする。また、特にアイヌ文化を育んできた伝統的な有用植物が持続的に生育する森づくりを推進する。

#### ② 河岸段丘および低地

河岸段丘および低地は、その地形的特徴が大きく損なわれないよう土地の形質を保全する。低地および河岸段丘に立地する各種遺跡地は、周辺の土地利用との調和を図りながら保全する。加えて、特に近代開拓の歴史を有する生業景観については、周辺景観に配慮をした土地利用を行う。

河岸段丘上のコタン跡やその他遺跡地の立地は、水害等の自然災害を避けた結果の土地利用であることを理解し、今後の市街地の形成にあたっては、周辺の景観保全の観点とともに防災的な観点からも河川や山地側に市街地を広げ過ぎることのないよう、その土地利用に配慮する。

近代以降のアイヌ文化継承に関する施設である北海道大学文学部二風谷研究室(旧マンロー邸)や萱野茂二風谷アイヌ資料館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館とチセ群、その他歴史的に重要な建造物の立地するエリアでは、歴史的な要素(遺跡地など)の立地等に配慮しつつ、その機能の継承やアイヌ文化継承に資する土地利用を推進する。

#### ③ 河川

河川においては、河川に生息する魚類や周辺に生育する河畔林・溪畔林の保全・回復に努める。生態系保全においては、外来種の侵入を防ぐことや駆除についても考慮する。河川の河道の変更や護岸工事など大規模な改変を行わないよう努め、安全上などの理由でやむを得ず改変を行う場合には、自然素材の活用や魚道の設置などの必要な代替措置を講じるよう努める。河川沿いに立地する文化的な名勝地、伝説地、遺跡地(チャシ跡を含む)、開拓遺産については、それらの保存と活用を推進する。

## (2) イウオロ別の方針・考慮事項

### 1) VI ピラウトウルコタンのイウオロ

ピラウトウルコタンの立地した河岸段丘上には、近代市街地が形成され、役場や学校、図書館などの大型の公共施設が多く立地している。今後の市街地の更新においては、前項でも示したように、近代以前の生活空間のあり方に学び、防災的な観点から河川側に市街地を広げすぎないように配慮する。

市街地の背後には、歴史的な義経神社とその神社林が広がっており、また、国道の整備等により形状は多少改変されているものの、ハヨピラとピラウトウルレレケという沙流川の狭まった特徴的な崖地がこの地の景観の広がりの規定しており、こうした土地の形質の保全を図る。

河川・低地には、伝統的に利用されてきた水棲植物の再生事業が行われており、また沙流川の対岸の沢（アベツ）の奥地では、21世紀アイヌ文化伝承の森事業における有用植物の育成実験が行われている。これらはアイヌ文化の伝統的な自然資源の再生を行う代表的な場であり、さらなる促進を図る。

### 2) VII ニプタニコタンのイウオロ

ニプタニコタンのイウオロには、比較的広い低地が存在しており、近代の農地開拓のシンボルとしての頭首工や沙流川下流域に多く存在する軽種馬牧場などが立地している。土地形質を保全し、周辺環境との調和に配慮する。

### 3) VIII ピパウシコタンのイウオロ

ピパウシコタンのイウオロには、コタン通りなど集落要素が残されていることに加え、近代以降の旧マンロー邸や旧青年図書館、二風谷こども図書館、二風谷コタンや二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂アイヌ資料館など、アイヌ文化継承に関わる構成要素が多数立地し、またチプサンケやアシリチェブノミなどの伝統的な行事を行う現代的な舞台でもあり、こうしたアイヌ文化振興の拠点地域としての相応しい土地利用及び景観形成を図る。

### 4) IX カンカンコタンのイウオロ

カンカンコタン跡地周囲のチャシ跡等を含む遺跡地においては、伝承地を含めた一体的なまとまりとしての景観形成に配慮する。集客施設として整備された二風谷ファミリーランドにおいては、周囲に立地する遺跡地やカンカン沢などとの一体的な景観形成および活用を図る。

### 5) X ペナコロコタンのイウオロ

ペナコロコタン跡地の付近に残されているソラッキ（湧水）や生活道路、沢の対岸との往来の際に目印にもなっていたといわれるご神木等の、集落要素の一体的な保全に努める。こ

これらの河川側にはペナコリコタンのフシココタン（移転前の古いコタン）跡や遺跡地、ペナコリのタブコプやイムチトヌプリと呼ばれる伝承地である山地があり、そして河川（および対岸）側から見ればアイヌ語でペテウコピと呼ばれる沙流川に額平川が合流する地点と連続した地形的なまとまりを持ったエリアであるため、特に重要なエリアとして、その地形的特徴の一体的な保全と修景を図る。

#### 6) XI シケレペコタンのイウォロ

特徴的な伝承地であり名勝ピリカノカにも指定されているオキクルミのチャシやムイノカが立地する崖地一体は、アイヌ文化を物語る特に重要な場所として土地の形質を保全する。また、コタンのあったと思われる対岸の低地および河岸段丘においては、オキクルミのチャシやムイノカへの眺めを妨げないよう、周辺の土地利用及び工作物の設置等について十分に配慮する。

#### 7) XII ニオイコタンのイウォロ

ニオイコタンのイウォロには、コタン跡と、複数のチャシ跡が額平川の両岸に一定の間隔で立地しており、それらが一体的に眺められるよう配慮した土地利用および修景を図る。また、荷負本村の集落がある河岸段丘上から眺められる額平川とポロシリ（名勝ピリカノカ）の一体的な眺望景観を保全するため、周辺の土地利用及び工作物の設置については十分に考慮し、必要に応じて修景を図る。

#### 8) XIII-1 ヌプキペッコタンのイウォロ-1

ヌプキペッコタンのイウォロの貫気別や芽生周辺に関しては、蛇行が特徴的な額平川の形状と、遺跡地や近代開拓景観が展開する低地および河岸段丘、そして特徴的なシュブンタブコプなどの山地などの一体的な土地の形質保全に努める。ポロシリ眺望の視点場の適地でもあるため大規模な建築物・工作物の設置は極力避ける。やむを得ない場合は近代の開拓景観を妨げないよう配慮し、修景を図る。

#### 9) XIII-2 ヌプキペッコタンのイウォロ-2

ヌプキペッコタンのイウォロにおける芽生や豊糠の奥地に広がる国有林においては、額平川の源流域であり信仰の対象であったポロシリにつながる神聖な場所として、その原生的な森林生態系やアオトラ石の露頭地などの岩石資源の保全を図る。

#### 10) III シュムウンコッ・IV サルパ・V ニナコタンのイウォロの河川

ピラウトウルコタンから下流の沙流川は、平取におけるアイヌ文化振興の象徴である沙流川下流の河川景観とその周辺に生育した河畔林の生態系を保全する。

### (3) その他の事項

アイヌ語地名が残されている場所については、その名称の由来となっている地形的特徴や物語が理解できる状態が維持されるよう保全する。特にコタンの名称の由来となっている沢は、イウオロの重要な要素であるため、土地の形状を改変しないように保全するとともに、地域住民及び観光客が、アイヌ語地名と地域的特徴を認識しやすい状態となるよう、周辺をふくめた景観形成に留意する。

生業としての利用、あるいは防災上の観点から必要な改変を行う場合においては、生物多様性・景観の保全・環境負荷を考慮した整備と修景による保全につとめる。

## 4-4 重要な構成要素

### (1) 重要な構成要素の考え方

平取の文化的景観における重要な構成要素は、地形分類との対応関係から 16 の類型に整理される。以下に構成要素類型別の価値および保全方針の概要について示す。

表 4-2 重要な構成要素の類型とその価値及び保存管理の方針の概要

地形区分	構成要素の類型	構成要素の具体例	文化的景観としての価値	景観保存・管理の方針
山地	森林	イオルの森、自然素材と文化を育む森林など	アイヌの日常の狩猟・採集の場としての森の姿を物語る要素	土地の形質を保全する。また生態系サービスの最大化を目指した管理・施業及び利用により、森林の保全・回復と適度な利用を図る。
	林業関連	馬搬道跡、炭窯跡など	近代林業の歴史を物語る要素として	土地の形質を保全する。
	地質・岩石	アオトラ石の露頭地など	古代から利用された自然資源の実際の採掘・採取地として	土地の形質を保全する。また、資源の過剰利用を防ぐ。
	神社	義経神社など	幕末から近代開拓期にかけての集落の形成や産業に関わる当時の歴史を物語る要素として	伝統的な継承方法により保全する。
沿岸段丘 および 低地 ※海成段丘を含む	伝承地	ポロシリ、オプシヌブリ、チノミシリ、など	アイヌの人々に古くから伝承されてきている形態的に特徴のある要素として	土地の形質を保全する。
	チャシ跡	ウンチャシ跡、ニオイチャシ跡など	アイヌの人々が見晴らしのよい河岸段丘上に拠点を構え生活していたことを示す要素として	土地の形質を保全する。
	樹木	二風谷のご神木など	地域住民に長年大事に受け継がれている要素として	当該樹木を保全する。
	道	ピラウトゥルコタンの道、ペナコリのアイヌルなど	アイヌの人々のコタンを形成した場所やコタン間、あるいはコタンと自然地との往来を示す要素として	土地の形質を保全する。また、周辺環境へ配慮した上で、歴史的な道筋が失われないよう保全する。
	遺跡地	ピバウシ1遺跡、カンカン2遺跡など	古くから現代に至るまで人々の生活文化が展開された土地であることを示す前近代アイヌ文化期の要素として	土地の形質を保全する。
	建造物・碑	旧マンロー邸、二風谷こども図書館など	アイヌ文化振興またはアイヌ文化と近代開拓との融合を物語る要素であるとともに活動の拠点として	敷地（土地）の形質を保全する。また、その形態的な特徴とアイヌ文化振興に関わる機能を継承する。
	農地・牧野	開拓農地、町有牧野など	近代開拓以降に形成された生業（農業）景観の特徴的な自然地形とアイヌ・和人の協働の経緯が理解できる要素として	土地の形質を保全する。やむを得ず大規模な建築物・工作物の建設する場合には、修景を行うなど景観との調和に努める。
河川	湧水地	ペナコリのソラッキなど	コタン跡付近において沢や崖地からの湧水を利用して生活していたことを窺い知ることのできる要素として	土地の形質を保全する。その周辺環境の保全に努める。
	農業関連	頭首工	近代の農地開拓のシンボルとして	農業施設としての機能を維持し、その立地的・形態的特徴を損なわないよう修理修景を図る。
	水辺空間	イオル水辺空間、標本園など	アイヌがかつて川洲畑を営んだ生業空間を想起できる場として	河川環境の保全に配慮し、アイヌ文化の有用植物の育成を図る。
	河畔林	額平川の河畔林など	アイヌの生活を支えてきた資源林（ハルニレ他）であり、その生活文化を伝える要素として	河畔林とその周辺の環境を含めそのた自然生態系を保全する。
河川	にぶたに湖、額平川の峡谷、カンカン沢など	古くから人々が暮らしてきた基盤としての地形を形成し、またコタンやチャシの立地、またその名称に由来する要素として	河川環境の復元、文化環境の振興に努める。とくに河川管理区域内においては、直線的な護岸工事などを行わないようにする。	

## (2) 重要な構成要素の一覧表

具体的な重要な構成要素を以下の一覧表に示す。

ここではイウォロごとの要素類型に沿って記載する。

表 4-3-1 VI ピラウトウルコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	その他指定等
産業関連	山の神を祀る鳥居	平取町	一次	
神社	義経神社	義経神社・平取町	四次	
伝承地	ペンケピラウトウルナイ	平取町	一次	
	パンケピラウトウルナイ	平取町	一次	
	ハヨピラ	平取町	四次	
	おおがんげ	沙流土地改良区	四次	
	ペンケトコム	民間	二次	
	パンケトコム	民間	二次	
道	ピラウトウルコタン跡の生活道路	国土交通省・平取町	四次	
	隣の川筋への古道	平取町	一次	
河畔林	イオルの水辺空間	国土交通省、平取町	四次	

表 4-3-2 VII ニプタニコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	その他指定等
産業関連	沙流頭首工	国土交通省	一次	

表 4-3-3 VIII ピパウシコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
伝承地	スルクウンコッ	平取町	一次	
	ウカエロッキ	沙流川森林組合	一次	
道	コタン通り	国土交通省・平取町	四次	
	マンロー坂	国土交通省・平取町	四次	
	ルオマナイ	平取町	一次	
建造物	旧二風谷青年会図書館	平取町・二風谷自治会	四次	
	旧マンロー邸	北海道大学	一次	
	平取町立二風谷アイヌ文化博物館とチセ群	平取町	一次	
	二風谷子ども図書館	民間	四次	
碑	黒田彦三頌徳碑	平取町・二風谷自治会	四次	
	遠星北斗歌碑	平取町・二風谷自治会	四次	
	ボンオサツの湧き水跡地碑	国土交通省・二風谷自治会	四次	
	金田一京助歌碑	民間	四次	

表 4-3-4 IX カンカンコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
伝承地	オプシヌプリ	林野庁	一次	

表 4-3-5 X ペナコリコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
伝承地	ペナコリのタブコブ	民間	二次	
道	ペナコリコタン跡の生活道路	平取町	四次	

表 4-3-6 XI シケレペコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
伝承地	イムテトヌプリ（荷負富士）	民間	二次	
	ムイノカ	民間	二次	名勝ピリカノカ
	オキクルミのチャシ	民間	二次	名勝ピリカノカ

表 4-3-7 XII ニオイコタンのイウォロ

類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
伝承地	ウンチャシ跡	民間	二次	民間
道	ペンケニオイコタン跡の生活道路	国土交通省,北海道,平取町	四次	

表 4-3-8 XIII-1 ヌブキペッコタンのイウォロ-1

要素類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
伝承地	シュプンタブコブ	北海道、民間	四次	
	イペペシナイ	民間	二次	
	チノミシリ2	国土交通省	四次	
	チノミシリ1	国土交通省	四次	
碑	馬頭観世音碑	平取町	一次	
農地・牧野	「びらとり和牛」が放牧されている牧野	平取町	一次	
	すずらん群生地	平取町	一次	
	ハルニレ林	国土交通省	一次	
	牧野林	平取町	一次	
河畔林	ノカピライウォロ標本園	国土交通省	四次	
	河岸段丘上の河畔林（芽生）	平取町	一次	
	額平川の河畔林	北海道	一次	
河川	額平川の峡谷	北海道	一次	
	額平川の蛇行	北海道	一次	

表 4-3-9 XIII-2 ヌブキペッコタンのイウォロ-2

要素類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
岩石	アオトラ石の露頭地	林野庁	四次	
伝承地	ポロシリ（幌尻岳）	林野庁	四次	名勝ピリカノカ

表 4-3-10 XVII 複数のイウォロにまたがる重要な構成要素

要素類型	構成要素名	所有者・管理者等	選定	指定等
森林	沙流山林南区域の森林	民間	二次	
	生活民具の自然素材と文化を育む森林（もり）	林野庁	三次	
	かつての姿を彷彿とさせる大径木も残る尾根筋の樹林	林野庁	三次	
	天然林化を目指すトドマツなどの針広混交林	林野庁	三次	
	イオールの森	平取町	一次	
	沙流川流域を見守るポロシリを遥拝する森林（もり）	林野庁	三次	
	にぶたに湖右岸の国有林	林野庁	三次	
林業関連	入植者たちによる製炭業と集落形成を物語る炭窯跡	林野庁	三次	
	近代の伐出作業支えた馬搬道跡	林野庁	三次	
	林業によりもたらされた作業の安全を願う山神様	林野庁	三次	
	日高山脈の造山運動を想起させる堆積層の露頭	林野庁	三次	
	地域の賑わいをもたらした造園木のある森林（もり）	林野庁	三次	
伝承地	IWORとしての利用を示すアイヌ語地名のある沢	林野庁	三次	
河川	にぶたに湖	国土交通省	一次	
	ペテウコピ	国土交通省	一次	

